

04-3 大学生の性自認及び性的指向に関する意識調査

大野武丸、石出結子、岡村楨、鴨川隼弥、倉橋徹、齊藤海斗、山本百香（信州大学医学部医学科）、塚原照臣（信州大学医学部産業衛生学講座）、野見山哲生（信州大学医学部衛生学公衆衛生学教室）

キーワード：性自認、性的指向、性的マイノリティ、性差

要旨：性的マイノリティについて、医学部医学科の学生を対象に、性差による性的マイノリティに関する許容を調査した。性的マイノリティに対する許容と性差には関連がみられなかった。

A. 目的

性的指向、性自認に関する社会的な関心と認知が高まりつつあり、学校や職場などでその対応が求められるようになってきている。対策を施したとして、当事者が自認する性に関する施設等を使用することについて、生物学的に異なる性の者がそれを認めるか、例えば、自認する性のトイレ利用を受容するか、については、必ずしも全員が賛同するとは限らず、多様な考え方、価値観があると予想される。対策の起点として、まずは男女別の性的マイノリティに関する認識を調べる必要がある。性的マイノリティに関する認識、許容を調査し、その認識に関連する要因を明らかにすることを目的とした。

B. 方法

本調査は、2022年度信州大学医学部衛生学公衆衛生学教室の実習において実施した。対象は信州大学医学部医学科3年生（114名）とした。調査はアンケート形式とし、Google formで作成した選択式質問票を用いた。調査は、2022年10月3日～10月5日の期間に実施した。

対象者の背景として、性別、出身地、性的マイノリティの知り合いの有無、別学（男子校、女子高）の経験の有無、性的マイノリティに関する授業経験の有無、性的マイノリティの人物が登場する映画・テレビ・本を見たことの有無、を調べた。また、性的マイノリティに関する知識を問う質問を5問（二択）調査した。

性的マイノリティに関する認識として、以下6問の賛否を、賛成、反対、どちらでもない、の三択で調査した。

- 1) 同性婚が法律で認可されること。
- 2) 『身体は男性であるが心が女性の選手』が女子選手のスポーツ大会に出場すること。
- 3) 『心は同性であるが身体は異性である方』がトイレ・更衣室を使用すること。
- 4) 宿泊行事において、性的マイノリティの方がその身体的性別とは異なる部屋を使用すること。
- 5) 『身体は女性で心は男性の方』がズボンを着用する、又は『身体は男性で心は女性の方』がスカートを着用すること。
- 6) 『身体は男性だが心が女性の方』が女子校に入学すること。

以上の6問については、賛成と回答した数が3問以上の群と3問未満の群の二群に分けた。賛成が3問以上の群を、性的マイノリティに対する許容度が高い、と定義した。性的マイノリティへの許容度に関連する要因の検討は、ロジスティック回帰分析を行った。許容度を従属変数、基本属性6つと知識を独立変数とした。統計解析ソフトウェアはIBM SPSS Statistics ver.28.0.10を用い、有意確率は0.05未満とした。

C. 結果

有効回答は104名（91.2%）から得られた。104名の内訳は、男性60名、女性44名だった。出

身地は、東京 23 区 18 名 (17.3%)、政令指定都市 17 名 (16.3%)、その他 69 名 (66.3%)、別学の経験は 30 名 (28.8%)、性的マイノリティの知人がいる 37 名 (35.6%)、性的マイノリティに関する授業経験あり 56 名 (53.8%)、性的マイノリティの人物が登場する映画等を見た経験あり 84 名 (80.8%) だった。性的マイノリティに関する知識問題は、5 問全問正解者は 48 名 (46.2%) だった。

マイノリティに関する認識 6 問について、賛成と回答した者は次の通りだった。

同性婚が法律で認可されること 79 名 (76.0%)、スポーツ大会への出場 10 名 (9.6%)、トイレ・更衣室の使用 23 名 (22.1%)、宿泊行事時の部屋使用 37 名 (35.6%)、ズボン・スカートの着用 94 名 (90.4%)、女子高への入学 50 名 (48.1%)。

認識 6 問について、男女別で比較したところ、いずれの設問も男女間で有意な差はみられなかった。

性的マイノリティに対する許容と性別との関連についてのロジスティック回帰の結果を表 1 に示す。許容と性別に関連はみられなかった。

表 1. 性的マイノリティーに対する許容と性別等との関連

変数	項目	人数	調整後オッズ比	95%信頼区間	p値
性別	男	60	0.521	0.907-4.629	0.122
	女	44	reference		
別学経験	はい	30	2.348	0.937-6.607	0.068
	いいえ	74	reference		
教育	はい	56	2.049	0.228-1.191	0.085
	いいえ	48	reference		

D. 考察

性的マイノリティに対する許容と性差に関連はみられなかった。生物学的な性による性的マイノリティに対する許容は、対策を講じる上で重要な要素となる。しかし、性差はみられず、男女ともに性的マイノリティに対して許容していると考えられた。

有意確率が 0.10 未満の変数として、知識、出身地、教育、別学、がみられた。これらに関連する要因をさらに調査する必要があると考えられた。本調査の対象者は医学科の学生という集団であり、また、対象者数も約 100 名だった。よって、本調査結果は一般化するには限界があり、今後、他学部の学生を対象に、調査人数を増やして検討を行う必要がある。性的マイノリティについて、その許容を測定する標準的な指標はなく、本調査で用いた許容は、調査者が独自に定義したものである。性的マイノリティについての認識を問う 6 問のうち、3 問以上の賛成を、性的マイノリティに対する許容度が高い、と定義した。各問の賛成の回答率にはばらつきがあり、単に 3 問以上でなく、各問の重み付けを行い、許容群を定義すれば、結果が異なった可能性は否定できない。今後、一般化された許容を測定する指標の開発が期待される。また、許容については調査者個人の価値観など本調査で把握しきれていない要因が寄与している可能性がある。

E. 今後の展望

性的マイノリティに対する許容と性差には関連がみられなかった。

F. 利益相反

利益相反なし。

G. 文献

- 1) 東京都総務局人権部. 性自認および性的指向に関する調査. 東京都.
- 2) 公益財団法人京都市男女共同参画推進協会、特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ. LGBT 等性的マイノリティに関する意識調査.
- 3) 釜野さおり他. 性的マイノリティについての意識 - 2015 年全国調査報告書.